

120年をつなぐ

あなたと歩む新たな歴史

旧本庄商業銀行煉瓦倉庫

国登録有形文化財



昭和52年(1977)からローヤル洋菓子店として親しまれた煉瓦倉庫



建設当初の本庄商業銀行。合併を経て昭和18年(1943)に本庄支店が廃止される

明治29年(1896)に建てられた煉瓦倉庫は、銀行が担保として預かった繭を保管するための倉庫として使用されていたのです。繭を保管する場所を持たない中小規模の製糸業者にとって、繭を保管してもらい、お金を借りることできる本庄商業銀行とその煉瓦倉庫の存在は、欠かすことのできないものでした。そのことから、煉瓦倉庫そのものが当時の本庄の財政の支えとして、また、絹産業が興隆していくうえで、重要な役割を担っていたと言えるのです。

そこにあり続ける倉庫

清水店(現在の清水建設)により建設された煉瓦倉庫

は、西洋からもたらされた煉瓦造技術が地震大国日本で発展を遂げたころ、当時の最新技術により建てられました。そのため、多くの煉瓦造りの建物が崩壊した関東大震災を乗り越え、現在まで大きな損傷なく、その姿を残しています。これまでいくつもの所有者を経て、最近ではローヤル洋菓子店としても親しまれていた煉瓦倉庫は、その用途はさまざまなものに対応可能。取り扱いがデリケートな繭を保管するために、換気や通気性に配慮された建物であり、その煉瓦壁や木組み(キングポストトラス)など、当時の技術の高さや建物としての美しさを今に伝えています。

横

浜赤レンガ倉庫や神戸煉瓦倉庫など、その歴史的な煉瓦倉庫は、まちのシンボルとして人が集い、活気付く場所となっています。

本庄市にも、120年以上前から中山道沿いにたたずむ煉瓦倉庫があります。かつての本庄町から、その場所が変わることなくこのまちと歩み続けてきた旧本庄商業銀行煉瓦倉庫。耐震補強工事を終えた煉瓦倉庫が今、このまちのシンボルとして、新たに生まれ変わります。

全国有数の繭の集積地

日本の近代化を支えた絹産業。明治5年(1872)、官営の富岡製糸場の設立を皮切りに、この地域でも、絹の原料となる繭の生産が盛んになりました。

また、同製糸場の初代場長の尾高惇忠が、本庄を繭取引の拠点としたことをきっかけに、全国有数の繭の集積地となっていきました。製糸工場が次々と建ち、周辺の養蚕農家と一体となり、一大養蚕地域として栄えたのでした。



尾高惇忠により、全国有数の繭市場として栄えた本庄町(明治45年)

絹産業を支えた煉瓦倉庫

そのような本庄の絹産業と経済を支えたのが、本庄商業銀行、そして、その煉瓦倉庫だったのでした。

特定の時期にのみ出回る繭をすばやく買い付ける必要があった製糸業者は、短期間で大金を必要とします。そこで、その資金繰りに対応するため、繭を担保として保管する代わりに、購入資金を貸し付ける本庄商業銀行が明治27年(1894)に設立されました。



本庄宿周辺地域では、月に計18日も市が開かれ、繭市場が賑わった

Rengasoukumemo

現在に引き継ぐ建築の意志

清水店による当時最高水準の建築術

煉瓦倉庫は、現在の清水建設の礎を築いた2人の技師により設計されました。

清水店3代目技師長であり、合資会社清水組改組移行後に初代社長となる清水釘吉。釘吉から技師長を引き継いだ4代目技師長の岡本鑒太郎。この2人の帝国大学(現在の東京大学)出身の若い技師により設計された煉瓦倉庫は、当時最も本格的な設計であり、先進的な建造物であったといえます。

清水店の建設から120年以上経過した現在、清水店の技師たちの意志を引き継いだ清水建設の耐震補強工事により、旧本庄商業銀行煉瓦倉庫は生まれ変わりました。



清水釘吉 (1867-1948)



岡本鑒太郎 (1867-1918)

日本銀行や東京駅にも使用

日本煉瓦製造株式会社製の煉瓦で建築

煉瓦倉庫に使用されている煉瓦は、日本煉瓦製造株式会社の上敷免工場(深谷市)で作られたものだということが判明しています。

日本煉瓦製造株式会社は、明治20年(1887)に渋沢栄一らにより設置され、明治22年(1889)、日本で初めて機械生産を行う煉瓦工場として上敷免工場が建設されました。最盛期には、年間1,000万個以上の煉瓦が生産され、東京商工会議所や東京府庁などに使用されています。工場のあった深谷市には、「ホフマン輪窯6号窯」「旧事務所」「旧変電室」、専用線であった「備前渠鉄橋」が現存し、国重要文化財に指定されています。



▲全国に4基しか残っていない「ホフマン輪窯」(写真:深谷市教育委員会提供)